

【テーマ】 「国家プロジェクト」へ繋ぐ「古文書の活用」

… 「地方創生の成功」： 日本経済 底上げは古文書が基本

●技術力を公開？

当社は今年で創業 56 年目、創業者は森松幹雄。私（森松義喬）の父親です。

「古文書」を主とした「各記録」の「マイクロフィルム撮影」に特化。

1990年代には先進的な大学教授の下、そして国立機関所有の高画素デジタルカメラ実証実験の担当となり、いち早く「古文書デジタルカメラ撮影」の経験を重ね、国内最高峰のお客様方にご用命戴き、今があります。



森松義喬社長

<http://www.kmsym.com/bunken/mituori2016.pdf> (会社案内アーカイブズ用 三折りパンフレット)

- ・宮内庁（書陵部）御用達は、「最善の撮影技術」等が必要 30 年以上継続してご用命戴く国内 2 社内の1社。
 - ・国会図書館 大量電子化 は、「最新のデジタル技能」等が必要。業務全体を外注せざるに対応できる「技術力・経験・ノウハウ」を有する唯一無二の会社。（他に落札した大企業は下請け 5～15 社の技術力で対応）
- 米国の大企業経営者が噂を聞きつけて当社の作業現場の見学を希望（現在は HP から一部を公開）

プロの視点ではノウハウの多くが観えるため、見学は（全て）お断り。それらの「公開準備」である。

<http://www.kmsym.com/top/koltukai.html>

●古文書：（記録が未来を創る）

古文書の記載内容には、先人の「経験・知恵」がぎっしり詰まっています。幕末期には識字率が「世界最高峰」であった日本人は大量な古文書を作成。しかし災害・戦争で多くが消滅。今、ある古文書は運よく現存している唯一無二の各地域の記録であり、その地域の識字率が高かった「証拠」。今まで起きた災害等、その事前に撮影し、各地域の震災対策のための情報源となる内容の情報も多い、と想定できる。

※「古文書の内容」をも確認せずの「廃棄」は、その作成に筆記道具を揃え「手間暇」をかけて記録を遺そうと関わった人間の「時間」・「想い」・「命」、その全ての「廃棄」である。

それら膨大な量の各地域にある古文書は「世界遺産に相当する」と海外から賞賛されている事を、博識ある日本人でさえも多くが気付いていません。



寺子屋

●地方創生の成功：（江戸時代）

困窮する藩の財政を再生させた「上杉鷹山氏」や「山田方谷氏」等、その改革者達の多くは、各地域の記録、古くからの長所・短所を調査し、それらを利用して藩財政の復活に成功させました。

「過去の記録」や「言い伝え」から読み解く「事実」、「記録の復活」が「地域の復活」へと繋がることのできるチャンスであり、遠回りで手間暇かかるが最短の解決策。

「温故知新」が「藩の財政復活」の柱でした。

※ 古文書判読者の人材不足ゆえデジカメ画像化のみを急ぐ。近々 AI による OCR 化により記録革命に繋がる。

●有識者への提案：（高齢者・主婦・身障者・ニート等を国家プロジェクトで運用）

「温故知新」戦略、新たな地方創生・一億総活躍社会の実現：過去の提案書：

<http://www.kmsym.com/bunken/1001tihou.pdf> (厚生労働省へ 新たに作成予定)

<http://www.kmsym.com/bunken/komon003.pdf> (文科省へ 新たに作成予定)



【予算の上位化】により、当社が蓄積してきた撮影技術・技能、経験を全国同業社員に教育、そしてアプリケーションソフトの無料提供とその操作指導を約束。(WEB 上で公開)

「高齢者・主婦・身体障害者・ニート等」(健康な)に「古文書のデジカメ撮影」の伝授させる先生となります。全国各地域にある同業者(撮影指導会社)への指導(仕様書の詳細説明と作業マニュアル指導)も実現します。

●新しい「新しい仕事場」と同時に新しい「社交場」:

その設立が急がれています。<http://www.kmsym.com/bosyuu/k-basyo.pdf>

●代議士・官僚との交わり:

私は、仕事はもちろんですが様々な活動を進める中で、人とのつながりが必然と生じている、と実感しています。私の親戚、知人・友人やその親せき、学生時代OB方、国際友好活動などなど、今まで商売と関係無く活動していたあちこちの人脈が、5年ほど前から急につながり出す。その不思議さを感じています。

「古文書救済」への想いを数十年間発言し続けてきた事が人脈の和が勝手に繋がりはじめた原因かもしれません。

●記録管理学会との関わり

小川先生との出会いから始まります。私が20歳後半ごろ、東京学芸大学等での出前授業ご依頼者・記録管理学会の前会長小川千代子先生は、国立公文書館職員であり、当社のお客様でした。そして小川先生が発表された「記録管理院構想」(2002年)を知ったときは驚きました。

<http://www.archivists.com/ogawa/bunshokihonhokaisetsu.pdf>

小川先生が受け持つ「東京学芸大学の博物館資料保存論」(東京大学・中央大学等)のお手伝いは喜んでお掛けしております。利益はゼロですが当社社員のヤリガイは二重丸です。



東京学芸大等の出張授業の様子

●「誰がどのように?」「いつから?」「いくらで?」

こちらはHP 参考文献の提案書青色5・6をご覧ください。

各県、地域の撮影指導会社が初期段階からの指導にからむために「儲け過ぎない、損しない」方針に従って戴く事になります。「自社のみが利益を大きく上げれば良い」が強い方針の会社とは距離を置くこととなります。

●産・官・学・民が協力:

産・官・学・民の協力により、新技术を伝授された手先が器用なクール人材を作り出し、鼠算式に技術を継ぎ、各地域の古文書を救いながら地域創生の基本情報を調査しつつ、「内需拡大」、地域の「道の駅」等の充実・資料館・博物館の拡大等により国益を増大させ、新たに会得した撮影技術にて国際的な記録撮影に貢献するまでに発展できれば素晴らしいことです。

私は特にここ6年間、多くの時間をかけた超緊張の日々であり、「温故知新」の戦略を諦めずに成功させるまで取り組んで参ります。

初稿のリンク先: <http://www.kmsym.com/bunken/itiran.htm> (青色 No.7...記載分2ページ) ご理解、そして広く周知されるようご協力を戴ければ幸いに存じあげます。

(株) 国際マイクロ写真工業社 <http://kmsym.com>

代表取締役社長 森松義喬 & 生産部・営業部 h@kmsym.com

■訪問後記

充実したお話は尽きることなく、情熱的な話題が次々飛びだして、あっという間に時間が過ぎておりました。記録管理の大切さと共に、日々記録が失われていく恐ろしさも実感できました。地域資料を土地に根差した方々と共に記録し管理していくことは「地方創生モデル」そのもの。利益に直接つながらない活動も実践し社会・国際貢献に携わる森松社長の精神が、社員の皆様の熱気につながっていると感じました。

森松義喬様、長時間インタビューへのご協力を頂きありがとうございました。

そしてご同席頂いた菅井優士様、北村麻紀様、小川千代子先生ありがとうございました。

※今回のインタビュー記事に掲載しきれなかった詳細についてご寄稿を頂きました。

完全版は記録管理学会のWebサイトに掲載させて頂く予定です。

